

# 「実用」の意味するところ

東京高商・東京商科大学商学専門部の英語教育における神田乃武の“culture”\*

坂野 鉄也

2016年7月

## 目次

1	はじめに	1
2	英語教師神田乃武	4
3	“culture” という「実用」	10
4	おわりに	14

---

\* 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「20世紀前期の帝国日本における教養の知と技をめぐる実学リテラシー研究」[2015年度～2017年度](課題番号:15K02864)による研究成果の一部である。

# 1 はじめに

「実用」は、外国語教育、とりわけ英語教育をめぐる議論においてつねに鍵となる言葉のひとつであり、外国語教育において「実用」を志向すべきか否かはしばしば争点となる<sup>1)</sup>。それは、1947（昭和 22）年 3 月 31 日に施行された旧教育基本法以前の、明治・大正・昭和にわたる古い学校制度下においても同じであり、「実用」をめぐる議論があった<sup>2)</sup>。

こうしたなかであって、卒業後すぐに社会に出て働くことを前提とした「完成教育」の場としての実業学校における外国語教育では、とりわけ「実用」なるものがどうぜん意識されたと考えられる。東京高等商業学校（以下、東京高商と略す）教授として、あるいは退職後に名誉教授となってからも東京高商およびその後身である東京商科大学および附属商学専門部講師として、その死まで英語教育に従事した神田乃武も「実用」のための英語教育の尽力した教師のひとりである。

しかしながら、英語ならば“practical”あるいは“useful”という形容詞であらわされ

---

1) 第二次世界大戦後においても古くは、1975 年に当時の参議院議員平泉渉と上智大学教授渡辺昇一のあいだでも『諸君！』誌を舞台におこなわれた、いわゆる平泉・渡辺論争がある。ここでも外国語教育が「実用」を指向するべきかどうか争われた。論争の発端は 1974 年に平泉が自由民主党政務調査会に提出した「外国語教育の現状と改革の方向」という教育改革案、いわゆる「平泉試案」であり、渡辺がこれに反論したのである。争点は多岐にわたるが、単純化すれば当時の英語教育における非効率さを低めて「実用」に耐えうる少数者を養成することを是とする平泉と、非効率さを否定し国民への知的訓練としての価値を持つとする渡辺との見解の相違があった。またこれは、学校、教室という場においてできることとできないこととをどのように峻別するのかという見方の違いでもあった。平泉渉・渡部昇一 『英語教育大論争』 文春文庫、1995 年。こんにちの外国語教育をめぐる議論においても「実用」と「教養」との対立がみられる。拙稿 「第二外国語教育の「新しい発想」」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 146、2011 年 2 月、1-4 頁。

2) 英語教育史家である江利川春雄によれば、「英語教育（＝英語科教育）の目的論の礎石」となったのは、1911（明治 44）年に刊行された岡倉由三郎著『英語教育』に示された「教育的価値と実用的価値」論であった。岡倉は英語学習に、外国にたいする偏見や自国にたいする誇大の迷想を取り除き、人類がどこにあっても同じ働きをなしうることを知ること、母国語とは異なる思考形式を学ぶことによる精神的効用、という二つの「<sup>Educational Value</sup>教育的価値」と、英語を媒介としてさまざまな知識や考え方・感じ方を知るといいう「<sup>Practical Value</sup>実用的価値」の双方があると述べている。江利川 春雄 「学校の外国語教育は何を目指すべきなのか」 江利川 春雄ほか 『学校英語教育は何のため？』 ひつじ書房、2014 年、25-16 頁。および、岡倉 由三郎 『英語教育』 博文館、1911 年、39-40 頁（国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812330> 最終アクセス日：2016 年 6 月 29 日）。さらに、岡倉の弟子である福原麟太郎は、「岡倉の英語教育価値論を継承・発展させ、「文化的教養価値」を提唱した」。江利川、同論文、27 頁。福原はいわゆる「学校英語」では「教養」が涵養されるべきであり、「実用英語」は別の場所・別の方法によって学ぶべきだと主張している。たとえば、福原 麟太郎 『日本の英語』 恒文社、1997 年、3-6 頁（初出：「日本の英語——学校英語について——」 『英語青年』 第 104 巻第 2 号、1958 年 2 月、81-82 頁）。

るであろう「実用的な」あるいは「役に立つ」という語が指し示すものはこんにちにおいても揺れがあり、とりわけ外国語教育においてはいかなる基準によって「実用」が定義されるのか曖昧なままである<sup>3)</sup>。たとえば、「実用英語」という語によって示される英語がどのようなものであるのかは、発言者の職業や社会的地位、あるいは社会情勢などによって、その語に込める意味合いは多様であると考えられる<sup>4)</sup>。

とはいえ本稿は、「実用」なる語を一般的に定義すること、あるいは「実用的な」外国語教育を探求することを目的とするわけではない。教育全般に「実用」を志向すると考えられる実業学校、そのひとつである高等商業学校という場において、どのような外国語教育が「実用」とみなされたのかという点について、東京高商および、その後身である東京商科大学に附設された商学専門部における外国語教育を事例として示すことをその本旨とする。

しかしながら、史料が限られている状況で、東京高商における外国語教育を網羅的に論じることは難しい。現実の教場において展開された授業に見られる、教授内容や教授方法にかんしては情報が少なく再現することは難しい。しかも得られる情報も卒業生による回顧的文章をとおしたものが多く、現実を写しているかはかならずしも定かではない。また教科書についても、判明しているものは少なく、判明しているものもすべてが入手・閲覧できるわけでもない。たとえ教科書がわかり、閲覧することが可能であったとしても、教科書からだけでは授業を再現することはとうてい不可能である。さらに、高商ではロシア

---

<sup>3)</sup> たとえば、以下を参照。斎藤 兆史 「英語学習・教育の目的」 江利川ほか、前掲書、47 頁。こんにち「実用的な」英語の能力を測る指標として TOEIC や TOFEL といった試験を同列にあげる人々がいるが、たとえば TOEIC と TOFEL とでは性格が異なる。TOEIC は Test of English for International Communication の略称であり、一般的なテスト、すなわち TOEIC テストにおいては、言語にかんする四能力、すなわち「読む」「聞く」「話す」「書く」のうちの「読む」「聞く」という二つの「受動的な」能力を評価することによって「話す」「書く」という「能動的な」能力をも含めて「英語によるコミュニケーション能力を総合的に評価」するものであり、その内容は「身近な内容からビジネスまで」となっている。「TOEIC™ テストの特長」(<http://www.toeic.or.jp/toeic/about/what.html> 最終アクセス日：2016 年 6 月 29 日) それにたいし TOFEL は、Test of English as a Foreign Language の略称であり、「英語を母語としない人が、大学の授業で聞き、話し、読み、書く英語を使用および理解する能力を測定するもの」であり（「よくある質問」 <http://www.ets.org/jp/toefl/ibt/faq/> 最終アクセス日：2016 年 6 月 29 日）、「listening, reading, speaking, writing」の各スキルを組み合わせて、学術的な課題を遂行する能力も評価」する（「TOEFL iBT™ テストについて」 <http://www.ets.org/jp/toefl/ibt/about> 最終アクセス日：2016 年 6 月 29 日）。TOEIC とは異なり TOEFL においては四技能すべてについて実際の試験が課され、学術的運用能力が問われることになる。日常生活やビジネスにおけるコミュニケーション能力と英語での学術的な処理能力とでは性格が異なるのは明らかであろう。

<sup>4)</sup> たとえば、戦前期英語教育の第一人者のひとりである岡倉由三郎は「実用的な英語教授」とは、一般に言われるように「話すこと書くこと」を教えるのではなく「読書力の養成」であると述べている。岡倉、前掲書、41 頁。「実用」の含意がこんにち一般に想定されるものとは明らかに異なっている。

語、オランダ語、マレー語、中国語も教授されたが、これらは筆者の能力を超えた言語であり、これらの言語の教授内容に立ち入ることはできない。

そこで本稿ではひとまず、英語教育を柱として論じ、いわゆる「第二外国語」教育を含めた外国語教育に見通しをたてることとする<sup>5)</sup>。英語は、初等・中等教育において最初に教授される外国語であり、その英語に関する教育を外国語教育を論じるうえでの入り口と位置づけることは可能であろう<sup>6)</sup>。

またここでは、神田乃武という英語教師に焦点を合わせて論じたい。それは、二つの理由による。まず一つは、東京高商・商大を事例としたばあい、英語教育の歴史は神田乃武なくして語ることはできないからである<sup>7)</sup>。第二に、教育においてはどのような人が教えたのかという教員の経歴や教育観も重要になるが、外国語教育を担った全教員について網羅的に論じることは史料上の制約から難しい。限られた史料のなかでは、その経歴さえ十分に知り得ない人物もいる<sup>8)</sup>。そこで東京高商・商大という場における英語教員の代表として神田乃武を取り上げ、その影響を見据えながら神田が想定する「実用」について論じることとする。

---

5) 高商における外国語教育の最大の特徴は、英語、ドイツ語やフランス語といった高等学校においても教授された言語以外の、中国語やロシア語、それに、スペイン語などが教えられたことであるが、これについては筆者がこれまで論じてきたスペイン語教育の状況を参照のこと。拙稿「旧制高等商業学校におけるスペイン語教育：山口高等商業学校の事例」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 148、2011年3月。および、「官立高等商業学校における「第二外国語」教育の変遷——神戸高等商業学校のばあい——」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 167、2012年8月。

6) たとえば、同じ英語教育であっても、高等実業学校である高商においては旧制高等学校とは異なる独自性があったことは予見できる。たとえば筆者は、滋賀大学経済学部創立90周年記念「彦根高商の日々——聞け黙々として語る史書（ふみ）——」（2013年10月21日～11月23日 於：滋賀大学経済学部附属史料館）の「百年前のグローバル・スペシャリスト養成」という小コーナーにおいて、彦根高商英語教科書、英作文課題を展示したが、第三学年の授業において Harvard Business Review が使用されており、その教材選択において旧制高等学校との明確な違いが見られた。なお、中等教育段階の実業学校の英語教育については、江利川春雄『近代日本の英語科教育史：職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』（東信堂、2006年）の第3章、特に商業学校については第4節（67-95頁）で扱われている。

7) 拙稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語教育を担った日本人教員とその教育」 滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.227、2015年4月、15頁、註41。および、山川喜久雄「英語：一橋大学英語百年の歩み」 一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学学問史』 一橋大学、1986年、1047頁。

8) 東京高商・商大において外国語教育を担った教員の概要については、すでに前稿において述べた。拙稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語教育を担った日本人教員とその教育」。

## 2 英語教師神田乃武

### 2.1 経歴：留学・帰国、そして教師に

神田乃武の経歴については、昭和女子大学近代文学研究室の手による近代文学研究叢書所収の紹介文に詳しいが<sup>9)</sup>、神田は1871年1月23日（旧暦では明治3年12月3日）に駐アメリカ合州国少弁務使（代理公使）となる森有礼に随って渡米し、1879（明治12）年に帰国している。その間、マサチューセッツ州にあるアマスト（Amherst）・ハイスクール（1875（明治8）年7月卒業）およびベラル・アーツ・カレッジの名門校アマスト・カレッジ（1879（明治12）年7月卒業、B.A.）、ウェストフィールドにある州立師範学校（Westfield Normal School 現 Westfield State University）で学んだ。彼は大阪の適塾や大学南校で学んだことはあるものの、彼が受けた教育の中心は、14歳で渡米して以降のアメリカ合州国で英語によって受けたものであった。また、滞米時は牧師や敬虔なキリスト教徒の家庭に寄宿しており、キリスト教的な家庭教育も受けていたと思われる。

帰国後は1880（明治13）年4月6日に大学予備門の講師に就任し、翌1881年に教諭となった<sup>10)</sup>。その後1886（明治19）年4月に大学予備門が第一高等中学校にあらためられてもそのまま教諭として残り、英語とラテン語を講じた<sup>11)</sup>。また、1881（明治14）年からは東京大学法学部と理学部の准講師となり、翌1882年からは文学部に出講した<sup>12)</sup>。さらに1886年に公布された学校令のひとつ、帝国大学令によって東京大学が帝国大学にかわってからは文科大学教授に就任し、おもにラテン語を講じた。そのため、帝国大学に

---

9) 昭和女子大学近代文学研究室 「神田乃武」 近代文学研究叢書 第23巻、1965年、17-70頁。なお、神田の遺品を一橋大学に受け入れ、整理し、文庫化した大場高志による詳細な年譜もある。大場 高志 「神田乃武文庫について」 『一橋大学図書館研究開発室年報』 第2号、2014年、40-41頁。

10) 昭和女子大学近代文学研究室編の「神田乃武」によれば、「英語及び史学を講じた」とされるが、『大学予備門一覧：本龔 自明治十五年至明治十六年』（35頁。国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813158> 最終アクセス日：2016年5月25日）では、「英語学」と記載されているのみである。

11) ラテン語は明治初期の高等中学校では教えるべき科目と位置づけられていた。「高等中学校ノ学科及其程度（明治十九年七月一日文部省令第十六号）」を見ると、外国語としては「第一外国語」と「羅甸語」が学科として掲げられている。ちなみに「第一外国語」は「通常独語若クハ仏語トス」とある。文部科学省 学制百年史 資料編（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318051.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318051.htm) 最終アクセス日：2016年6月21日）

12) 昭和女子大学近代文学研究室編 「神田乃武」、26頁。同書記載の神田の履歴は一橋大学庶務課に保管されていた神田の履歴書の記載に基づくそうである。ただし、『東京大学法理文三学部一覧 自明治十四年至明治十五年』（国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813152> 最終アクセス日：2014年10月26日）には職員として神田の名が記載されていない。

おける彼は英語教師というよりもラテン語教師だったといえる。

とはいえ彼は、帝国大学以外の学校においては英語教師でありつづけた。1888（明治21）年8月31日付で東京高等女学校教諭も兼任することとなり<sup>13)</sup>、第一高等中学校および高等女学校教諭として二校での英語教育を担った時期もあった。東京高等女学校教諭に就任したおよそ1年後の翌1889（明治22）年9月14日付けで第一高等中学校教諭を辞職したものの<sup>14)</sup>、嘱託教員として英語教育は継続していた。なお、1890（明治23）年には東京高等女学校も依願により免官となる<sup>15)</sup>。

こうした官立諸学校の教授・教諭として英語教育に携わる以外に、1889（明治22）年には外山正一や元良勇次郎と正則予備校を設立し、民間の教育機関においても英語教育に従事している<sup>16)</sup>。神田は元良の跡を襲い、1890年11月から没する1923年まで第二代の校長も務めており、その創設者であり運営責任者であったわけだが、間接直接に英語教育も担ったものと考えられる。さらに神田は、1902（明治35）年から1915（大正4）年のあいだ学習院でも英語を教えている。

本稿の中心となる高商の教授に着任したのは、1893（明治26）年9月11日付のことであった<sup>17)</sup>。また、外国語学校が東京高商附属として再設立された1897（明治30）年には同校の教授および主事となり、その二年後に東京外国語学校となった際には校長心得、のちに校長となっている。

また諸学校における教授・教諭として直接的な英語教育にかかわるほか、「師範学校中学校高等女学校教員試験検定（いわゆる狭義の「文検」）英語科」の「試験委員」を長らく務めている<sup>18)</sup>。また、1910（大正9）年2月に第一回試験がおこなわれた「高等学校高等

---

<sup>13)</sup> 大場、前掲年譜、40頁。これは、1888（明治21）年9月1日付の『官報』第1554号（1頁）でも確認できる（国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2944792> 最終アクセス日：2016年2月23日）。

<sup>14)</sup> 「文科大学教授兼第一中学校教諭神田乃武依願兼官被免ノ件」『国立公文書館デジタルアーカイブ』（国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?KEYWORD=&LANG=default&BID=F0000000000000073688&ID=M0000000000000952145&TYPE=&NO=> 最終アクセス日：2016年6月22日）

<sup>15)</sup> 「叙任及辞令」『官報』第2014号、1890年3月20日付、214頁。（国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2945266> 最終アクセス日：2016年2月23日）

<sup>16)</sup> この学校は、第一高等中学校への入学を希望するものたちを教育した一種の予備校として位置づけられる学校である。

<sup>17)</sup> 大場、前掲年譜、40頁。前野澄子の論考によれば、神田は自筆年譜において1892（明治25）年から高商で教えたことと記しているようだが（前野澄子「明治期における英語教育の指導者たち」『鎌倉女子大学紀要』第13号、2006年3月、104頁。）、明治26年2月25日という出版日付を持つ『高等商業学校一覧』の職員欄に神田の名はない。

<sup>18)</sup> 大場の年譜によれば、1886（明治19）年3月10日に「第2回中学校並びに師範学校教員免許学力試験委員を拝命」とあり、翌1887年3月24日に「尋常師範学校尋常中学校高等女学校教員免許学力試験委員

科教員試験検定（いわゆる「高検」）英語科」の第一回および第二回（1921（大正10）年2月実施）の試験委員も務めている<sup>19)</sup>。これらの教員検定には「無試験検定」という制度もあり<sup>20)</sup>、必ずしもすべての教員が神田の関わった検定を受けているわけではないが、神田は教員資格をあたえる検定委員として中等・高等教育機関における英語教育にも少なくない影響を与えていたものと思われる<sup>21)</sup>。

## 2.2 英語教育

このような経歴を持つ神田が東京高商・商大においてどのような英語教育をおこなったのかは断片的に知るしかないが、特に参考となる史料は、『英語青年』という雑誌が神田の没後に編んだ二つの特別号、『英語青年 神田乃武男追悼號』第50巻第11号（1924年3月1日）および『英語青年 Baron Kanda Number』第50巻第12号（1924年3月15日）である。ここには、さまざまな形で神田と関わった人々の、神田や彼の英語教育へのコメントや感想が寄せられている。

また、神田自身が英語教育について語ったものとしては、英語教育史資料第二巻にも所収された *English in Middle Schools* や<sup>22)</sup>、学習院の校友誌『輔仁会雑誌』に掲載された生徒向けの英文エッセイ *A Lesson in English* がある<sup>23)</sup>。前者については、「神田乃武の教授法についての考え方を知る上で重要」とする外山敏雄による評があるが<sup>24)</sup>、中等教育における英語教育について論じたこれらのエッセイは神田の英語教育観は示されているものの、本稿のテーマとする高等教育機関における「実用的」英語教育については直接的に語られることがない<sup>25)</sup>。

---

を拜命（以後毎年拜命、明治27年からは教員検定委員）」とある。大場、前掲年譜、40頁。厳密に言えば、1900（明治30）年に「教員免許令（明治33年3月31日付勅令第134号）」とともに、「教員検定委員会官制（明治33年3月30日付勅令第135号）」が出された後は、「教員検定委員会臨時委員」となる。

<sup>19)</sup> 後藤 正次 「高検が教える現代英語教育への示唆（そのI）」 『現代英米文化』第19号、75-76頁。なお、大場の年譜には高検試験委員就任についての記載がない。

<sup>20)</sup> 文検および高検の「無試験検定」については、拙稿 「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語教育を担った日本人教員とその教育」（22頁）を参照。

<sup>21)</sup> 神田は、文部省の視學員も努めており、全国の中等教育機関や高等教育機関を巡っていた。なおこれらの教育にかかわる職のほか、男爵、貴族院議員も務めており、外交にも携わることもあった。

<sup>22)</sup> これはもともと、神田が英文記事を寄せていた雑誌『太陽』に掲載されたものである。『太陽』第二巻第四号、1896年、231-235頁。なお、同号の236-238頁には同記事の日本語版も掲載されている。なお、雑誌『太陽』の英文欄は長らく、神田によって執筆された。小田 三千代 「『太陽』英文欄——英学者としての神田乃武を巡って」 『日本研究』第17号、1998年、257-271頁。

<sup>23)</sup> Kanda, Naibu, “A Lesson in English”, 『輔仁会雑誌』第72号、1907年、191 - 198頁。

<sup>24)</sup> 外山 敏雄 『〈明治から昭和まで〉日本の英語教育を彩った人々』 大修館書店、2015年、209頁

<sup>25)</sup> もう一つの史料群として、*Kanda's Crown Reader* のような、中等教育機関向けのテキストがある。し

英語教師としての神田の経歴は如上のとおり、大学予備門、第一高等中学、そして東京大学と、いわゆる当時の官僚エリートを養成するコースにおいて始められたのであるが、その神田が1893（明治26）年9月、官僚エリート・コース養成機関を離れ、実業エリート養成校である高等商業学校に移った。彼が高商に移った理由は定かではないが<sup>26)</sup>、これ以降、没するまでの期間、彼の英語教師としての職場の中心は職業教育の場である東京高商および東京商大附属商学専門部となる<sup>27)</sup>。英語教師人生のおよそ3分の2を高商・商大ですごしたことになる。

高商における神田の英語教育の特質としてあげられるのは、徹底した英語主義であろう。着任後数年（1895（明治28）年）のころ、神田の教授を受けた石川文吾は<sup>28)</sup>、以下のように書き記している。「科目別から云へば英講であつたが先生は殆ど日本語は使用されなかつた、左ればとて一々パラフレーズされるのでもなかつた、学生側から要求があれば、日本語も使ひパラフレーズもせられたのであるが平生は学生に自宅で十分の下調べを命じ置き教場では先生は単に彼の天下一品とも云ふべき洗練された発音で抑揚緩急の妙を画して原文を読み行かれ其間文法の説明 Emphasis の置き処 Pause の来るべき場所、Synonym, Antonym の説明、Allusion や Reference の解説、出処の説明等を委しく説述して（無論英語で）行かれたのである」。そして続く。「先生は屢々云はれた「英語を真に自分のものにするためには如何に訳すべきかに屈託する様ではならぬ、一読して意味が通ぜぬときは二読三読せよ——決して訳そうと思ふな——斯くして訓練を積んで行けば訳せずとも原文の意味が自分のものになる、斯くして間違つた文章や不穏当な文句は耳の方が承知せぬ様になるまで耳を練習せねばならぬ」。また、「先生は私等に英語で点想し英語で推究し英語で了解する事を教へて下された」<sup>29)</sup>。

---

かし、実業高等教育機関である高商および商大商学専門部における英語教育をテーマとする本稿では中等教育における英語教育を直接に扱うことはしない。そのため、この史料群については論じない。なお、1945年までの「戦前期」の英語科検定教科書では、神田の名が付された教科書が最も多い。江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』 研究社、2008年、62頁。

26) 東京外国語学校で神田と同僚であった本田増次郎は、神田が帝国大学から東京高商に移った理由について「大学に内外の専攻学者が排置せらるるに至つて」と記しており、英文学などの専門もたなかつた神田が大学の教育システム整備の結果、押し出されたかのように記述している。本田 増次郎「English-speaking に名誉づけた神田男」『英語青年 Baron Kanda Number』、357頁。

27) 大場、前掲年譜、40 - 41頁。高商への着任から死亡による免官までは、『東京高等商業学校一覧』および『東京商科大学一覧』の学校一覧でも確認できる。ほぼすべての学校一覧が、一橋大学リポジトリ HERMES-IR で閲覧が可能である。url<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/7363>（最終アクセス日：2016年2月22日） なお、リポジトリにない学校一覧についての情報は、拙稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語教育を担った日本人教員とその教育」2頁、註4にある。

28) のちの東京商大教授でベルギー留学後、母校の教壇にたち、「商業学」や「保険学」など以外に「英語」や「商業英語」も担当した。

29) 石川 文吾 「恩師神田先生の思ひ出で」『英語青年 神田乃武男追悼號』、326頁。



こうした日本語をとおさない英語の能力こそが中等教育を終了したものに求められることについては、*English in Middle Schools* においても述べられる。

Now, I believe, the kind of English which ought to be expected of a Middle School graduate is to be able to read at sight easy books like Robinson Crusoe, Parley's Universal History, and the like, and to be able to write and speak with tolerable accuracy.<sup>30)</sup>

日本語では、

扨余の信ずる所に依れば中学卒業生に望むべき英語はロビンソン、クルーソー或はバーレー氏万国史の如き極めて容易なる書籍を一見直に読み下し可なりに精確と称すべき英文を書き英語を話すに在り<sup>31)</sup>

と述べられている。またこうした手法を「<sup>ダイレクト、リーディング</sup>直読」“Direct Reading”と呼び、これを「窮竟の目的 (ultimate ends)」として中学校の最初の一、二年を担当する教師が心に記すべきことと位置づけている<sup>32)</sup>。この「直読」は、村田祐治が提唱した「直読直解法」“read at sight”や浦口文治の「グループ・メソッド」を想起させる。ただ、いずれの人物も神田となんらかの縁があった可能性があるとはいえ、彼らの手法と「<sup>ダイレクト、リーディング</sup>直読」“Direct Reading”とは直接、関係はないと考えられる<sup>33)</sup>。英語教育史家の江利川春雄の

30) Kanda, Naibu, “English in Middle Schools” *The SUN*, vol.2 No. 4, 1896, 232.

31) 神田 乃武 「中学校に於ける英語」 『太陽』第二巻第四号、1896年、236頁。

32) Kanda, “English in Middle Schools”, 235. 神田「中学校に於ける英語」、237-238頁。

33) 村田裕治は、中村敬宇が創設した同人社および東洋英和学校を修了したのち、帝国大学文科大学英文科選科で学び、学習院や第一高等学校で教授を務めた人物である。原武哲 「夏目漱石の学習院就職運動」 『語文研究』49、1980年、10頁、註7。『帝国大学一覽』（国立国会図書館のデジタルコレクションによって容易に閲覧ができる。）によれば、村田が帝国大学に選科生として在学したのは、1889（明治22）年9月から1891（明治24）年7月であり、神田が帝国大学文科大学でラテン語を講じていた時期と重なっている。選科生は今日の科目履修生に相当すると考えられるが、『帝国大学一覽』は明治22・23年版までは選科生の履修科目名が記載されているものの、明治23・24年版からは学科のみが記載されており、履修科目が明確ではない。明治22年に選科生となった村田は、その時点では英文科の英語のみの履修であったが、明治23年以降、英文科の選科生と記載されているのみであり、明治23年以降に英文科の必須科目であるラテン語を履修し、神田の教えを受けた可能性があるものの帝大において村田と神田とが接点を持ったか否かは現時点では不明である。一方、浦口文治は「文検」合格者であり、文検の際に神田と知己を得ていたと思われ、浦口が1918（大正7）年に東京高商に職を得たのは、神田の斡旋であったと考えられる。詳しくは、拙稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大學・産業大学の外国語教育を担った日本人教員とその教育」、21頁、註57。なお「グループメソッド」そのものは、東京商大予科や商学専門部で実践されただけでなく、着任前の同志社での講義においておこなわれていたようである。手塚 竜磨 「浦口文治の業績と生涯」 『英学史研究』 第10号、1978年、26頁。さらに、庭野吉弘は浦口の言を引きつつ、1913（大正2）年から約2年間の「ハーバード留学中に誰れ彼れといった特定の人物に

解説によれば、「直読直解」は、岡倉由三郎が述べたように英語の文章を早く読むためにはその内容を日本語を介さずにいかに早く理解するかということになる<sup>34)</sup>。たしかに、浦口がグループ・メソッドを最初に著した書に「外国文学研究への近道」との副題がついていることからわかるように、直読直解法もグループ・メソッドも英語で書かれた文章を早く読むことが目的とされている。しかしながら、直読直解法もグループ・メソッドも英語で書かれた文章を日本語として理解可能な範囲でいかに「訳す」のかという点に力点を置いてしまっており、神田が構想したと考えられる、聴覚に力点を置き英語を英語のまま理解することを想定した「直読」からは離れてしまっているように思われる。ただし、たとえば「明治 43 年東京高等師範学校附属中学校教授細目」には、「いわゆる直読直解の読書力を養わんとせば、文字を読み解する力の基礎として、まず声音の英語を聞いて解する力を養わざるべからず。」と記されており、英語を聴くことが「直読直解」の前提として考えられていたことは確かであり<sup>35)</sup>、「耳の練習」にこだわった神田の「直読」と「直読直解」とは発想としては繋がっている<sup>36)</sup>。

神田の「直読」という教育手法は、如上のとおり、東京高商に着任後すぐ始められたと推測されるが、晩年にいたるまで実践されたのかは定かではない。1925 年に商大を卒業

---

教わったのではなく、自らが編み出した方法論なのだと言ったのではないかと察せられる」と述べている。庭野 吉弘 「訳読史におけるグループ・メソッド：その評価と批判」『英語教育史研究』第 5 巻、1990 年、65 頁。また庭野は、浦口のグループ・メソッドの誕生は、単に浦口という個人に帰するのではなく、時代の空気が生み出したと述べており、間接的に神田の影響があった可能性はあろう。なお、手塚も手塚を参照した庭野も、浦口の高商教授就任を「大正 7 年 4 月」としているが、大正 7 年 9 月 30 日発行の『学校一覧 従大正七年至大正八年』によれば、1918（大正 7）年時点では講師であり、翌年度の『学校一覧』ではじめて教授となっている。また、浦口から神田への就職斡旋依頼の電話があったのが、1918（大正 7）年 3 月 5 日（一橋大学附属図書館神田乃武文庫内の神田乃武日記（請求記号 KN-B:38）による）であり、その一ヶ月後の 4 月に教授として任官するのは時間的にも難しいであろう。したがって、1918 年 4 月に教授就任したというのは誤りであろう。

34) 江利川、『受験英語と日本人』、79-80 頁。

35) 福原 麟太郎監修、高梨 健吉ほか編 『ある英文教室の 100 年——東京高等師範学校・東京文科大学・東京教育大学』 第 2 部資料集、295 頁。ちなみに、こんにち外国語学習において身につけるべき技能は、「読む」「聴く」「話す」「書く」という四つであるが、神田は「聴く」ということを技能として位置づけていない。神田にとっては「聴く」ことは言挙げするような技能ではなかった。Kanda, “A Lesson in English”, 191 頁。

36) 「直読直解」との関係では、日本の英語教育に直接教授法、オーラル・メソッドを普及させたハロルド・E・パーマーとの関係が想起されるであろうが、パーマーが文部省の英語教授顧問として招聘されたのは神田が亡くなる前年の 1922（大正 11）年であり、パーマーから神田へ直接的な影響があったとは考えられない。なお、パーマーについては以下の研究がある。伊村 元道 『パーマーと日本の英語教育』 大修館書店、1997 年。ただし、高商における英語教育という点でいえば、パーマーの作成した教科書が彦根高商でも使用されており、その影響は及んでいたとは言える。展示解説「彦根高等商業学校の英語科教科書」（滋賀大学彦根キャンパス内しがだい展示コーナー特別展「彦根高等商業学校の英語科教科書」2015 年 1 月～4 月。）

した杉本栄一（のちに東京商大教授）は晩年の神田の授業について次のように言述している。「僕らの聴いた神田先生の講義は「ブラック・キャット」で、それを先生が抑揚をつけて原文を読まれながら訳される、われわれは聴いているだけ……」<sup>37)</sup>。英語を聴かせるということへのこだわりはあるが、晩年の神田は授業の中で「訳す」ということを行っている。こうした変容がいつ生まれたのかは茫としている。

### 3 “culture” という「実用」

如上のとおり、神田自身の講義では英語を聴くことが重視されたと考えられるが、神田がほかの教員を含めた高商・商大での英語教育に同じことを求めていたわけではないであろう。たしかに、東京高商・商大・予科・商学専門部の英語教師たちの多くは神田によってリクルートされていたり<sup>38)</sup>、東京高商・商大の卒業生たちであった<sup>39)</sup>。多くの英語教員が神田の知己を得たのちに、あるいは神田に見込まれて着任している<sup>40)</sup>。それらの教員には確かに、海外で学位を取得したものも含まれるが、全ての教員が神田と同じように英語を話せたわけではないだろう<sup>41)</sup>。

神田の英語を使用する能力を踏まえたうえで、福原麟太郎は後年、12歳で英国に渡って教育を受け帰国した井上十吉とともに神田を次のように評している。「この神田、井上両氏のごときは学者でもなくいわゆる教育家でもない。英米で英米人のごとき教育を受けた、教養ある紳士というよりほかない」<sup>42)</sup>。このやや毒気を含んだ「教養ある紳士」とい

37) 「座談会 一橋社会学の七十五年」 『一橋論叢』 第24巻第5号、1950年11月、121-122頁。

38) 神田は「文検」や「高検」の試験委員を努めており、これらの合格者の中からこれかと思う人物をリクルートした可能性は高い。拙稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語科目を担った日本人教員とその教育」、20-21頁。たとえば、五味 赫<sup>あきら</sup>や西村 綱<sup>しげし</sup>といった第一回「高検」の合格者は合格した年に講師として採用され、さらに翌年には教授となっているし、第二回高検の合格者である古瀬良則や渡部行三も合格した年に中学校教諭から東京商大予科の講師となり、翌年には教授となっている。

39) 1886（明治10）年の東京商業学校設立以降、英語を担当した教師はのべ70名であり、そのうち、母校卒業生は10名、「経済英語」「商業英語」ではのべ16名のうち、12名であった。拙稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語科目を担った日本人教員とその教育」、14頁。

40) 上田は、「英語関係の先生はほとんど神田先生の手を経て入つて来たのです」と述べている。また上田は、自らが専任教員となったことは神田に負うところが大きいと述懐している。「座談会 一橋社会学の七十五年」、122頁。

41) 国民英学会を設立した磯辺弥一郎は、神田の話す英語を次のように評している。「日本人で男爵（神田のこと）のやうな立派なイングリッシュを話し得る人が又と世に出づるであろうか、否な今後多分でないであろう、尤も男爵よりもヨリ流暢に話し得る者は多く出づるであろうが、併し男爵のやうに極めて上品なりフアインドな英語を話し得る者は或は今後出ないかも知れない」（〈 〉内は引用者による）。磯辺彌一郎 「人格の人神田男爵」 『英語青年 神田乃武男追悼號』、325頁。

42) 福原、『日本の英語』、40-41頁。（初出：『日本の英学』 日本叢書51、生活社、1946年。）

う言葉が示すとおり、神田は自ら「教養」を背負っている人物であった。神田の教え子である上田辰之助も同様な指摘をしている。

上田は、東京高商専攻部を終え渡米し、ペンシルバニア大学で Ph. D. を取得後、東京商大教授となった人物であり、神田の手紙や日記をまとめた *Memorials of Naibu Kanda* に英語の一文を寄せており、英語教師ではないものの、神田の第一の教え子と考えてよいであろう。『英語青年 神田乃武男追悼號』における上田の神田評は、神田がどのような人物だったかをよく表しているものと思われる。曰く、「日本には英語の名人や英語字句に通曉する士はいくらでも居るが、真に英文化を体得して居る人は何人居るであろうか。技術としての英語、文学を超えてその精神であり、本質である英文化その者を会得して之を以て自分の人格にニューアンスをつけて居る真の英学者は私共の間に如何程あろう。神田先生は吾邦に於ける此稀なる英米文化支持者の一人であった。それ故に先生の英語には他の真似るべからざる一種の気品があった。その学識は素養ある典型的英国紳士の夫れであり、言語学者の専門的知識といふやうなものではなかった。先生の書かれた言葉、話された言葉が readable であり、耳に快かつたのは先生の思想が完全にアングロ・サクソソ魂の韻律に合致して居た結果である。」<sup>43)</sup>。上田のこの評にしたがえば、神田は、生徒・学生に英語の授業のなかでの彼の立ち居振る舞い、そして英語の音そのものをとおして英米文化を伝えていたことになる。

また上田は後年、以下のようにも述べている。「要するに一橋の学風に――商学の簿記や商業算術のコチコチの中に、何か人間的ゆとりを与えたものがあつたとすれば、その時分の英語英文学であつたと思います。だからその頃の卒業生が今でも懐かしく思うのは、商業算術や簿記ではなくして、神田先生のような先生から受けた教えでした。これがなくて、ただ商業教育一本槍であつたら、一橋の学問はこんなに伸びなかつたと思う。いいかえると商学に文化科学の豊かさが附加されなかつたでしょう。このことは非常に大事なことです。」<sup>44)</sup>

じっさい神田は、ある人物を東京高商の英語講師として招くにあたっても次のように述べたという。「商業英語といふ如き狭い範囲のものではなく、学生が余り算盤や帳簿にばかり屈託して居ては、人としての教養に大に欠くる所がある、どうか英語を通じて文学的趣味的又国際的な教養、所謂 culture 方面の開拓に資する様に骨を折って貰ひたい」<sup>45)</sup>。

<sup>43)</sup> 上田 辰之助 「一門弟の見たる神田先生」 『英語青年 神田乃武男追悼號』、329-330 頁。

<sup>44)</sup> 「座談会 一橋社会学の七十五年」、123-124 頁。

<sup>45)</sup> 舟橋 雄 「私が見た神田先生」 『英語青年 神田乃武男追悼號』、332 頁。なお、本引用は前稿「東京商業学校・高等商業学校・商科大学・産業大学の外国語科目を担った日本人教員とその教育」(23 頁)においても引用した。なお前稿の註 67 においても示したが、「教養」の語史については、進藤 咲子「教養」の語史 『言語生活』 第 265 号、1973 年、69 頁が詳しい。

しかし神田は、上田が言うように「商学に文化科学の豊かさ」を付加したり、「人間的ゆとり」を与えることのみを考えていたとは思われない。「教養」や“culture”は、確かに文学の素養であったり、哲学的思考様式であったりするわけではあるが、神田の構想が、竹内洋が示したような「教養主義」、つまり「哲学・歴史・文学などの人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」のような人格の陶冶のみを目指したものとは思われない。奇しくも、竹内が示すように、教養主義は旧制高等学校を舞台として定着したが<sup>46)</sup>、神田は旧制高等学校の前身である第一高等中学校、そしてその卒業生の進学先である帝国大学を離れ、高商に移ったのである。

神田が帝国大学から高商へと移ったのは、如上のとおり 1893（明治 26）年のことであった。帝国大学が「明治前期の実学から後期の虚学へと移行」したという中山茂の指摘にしたがえば<sup>47)</sup>、外国の知識や技術を移入するために必要な「実学」の人材としての神田が、「虚学」を旨とする帝国大学においては必要とされなくなったとも見える。上田が同座談会の前段で神田が指導した英語劇について述べたところで語っているように、東京高商・商大は本来「貿易学校ですから、海外で活躍する人を養成することが目的」<sup>48)</sup>、つまり、「実学」を指向する学校であった。

もともと高商における外国語教育が商業教育と密に結びついていたことはつとに指摘されている。たとえば三好信浩は、東京高商の前身校の一つである文部省の高等商業学校がもともと外国語学校に附設されたことを指摘したうえで、その設立の上申書を引き、商業教育と外国語教育が「教育的理由」をもって結び付けられたことを指摘している<sup>49)</sup>。つまり、外国語教育は商業教育において「実学」として位置づけられていたのである。そしてその「実学」には神田という人物が必要であった。

じっさいの英語教育に「教養」や“culture”を求めた神田自身も、英語を実学と捉えていたと考えられる。神田は *English in Middle Schools* において英語の知識を持つことを次のように位置づけている。

She[Japan] has come forth victorious from the storm of the battle field, only to be plunged into a mightier conflict —the struggle for supremacy in the field of commerce. Not the least of her weapon in this species of warfare is the

46) 竹内 洋 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』 中公新書 1704、2003 年、40 頁。なお、筒井清忠は「教養」を「文化の享受を通しての人格の完成」とするが、ここにおいても教養が人格の陶冶と結び付けられている。筒井 清忠 『日本型「教養」の運命』 岩波書店、1995 年、3 頁。

47) 中山 茂 『帝国大学の誕生——国際比較の中での東大』 中公新書 491、1978 年、116 頁。

48) 「座談会 一橋社会学の七十五年」、121 頁。

49) 三好 信浩 『増補 日本商業教育成立史の研究』、風間書房、2012 年、424 頁。

knowledge of European languages,—especially English, the intellectual currency of the commercial world<sup>50</sup>). ([ ] 内は引用者による。)

日本語では、以下のとおりである。

我邦己に戦勝の名誉を荷ふて砲煙弾雨の中を出でたりと雖是単に一層大なる戦争に入らんが為めのみ即ち商界の戦場に於て優勝の地位を占めんとするの戦争なり此戦争に就て最も必要なる武器は欧州語の智識に在り特に商業世界の無形的通貨たる英語の智識に在り<sup>51</sup>)

つまり神田にとって、英語の知識は商業において日本が優位な立場となるために必要な道具であるというのである。この考えは、高等実用教育を施し、海外で活躍するビジネスマンを養成することを目的とした東京高商においては、なお強く意識されたであろう。

しかし神田は、英語を商業に必要な道具であると考えていたにもかかわらず、のちに「コレポン」とよばれることになる英語商業文のような「実用英語」に相当するものを教えたのではない。彼が教授したのは、「ブラック・キャット」のような英語圏の文学作品であり<sup>52</sup>)、ラルフ・ワルド・エマーソン (Rolph Waldo Emerson) の評論であった<sup>53</sup>)。神田の中で整合性があったとすれば、神田は英語だけでなく、自らが体現する「教養」、「culture」をも「実学」の範疇としてとらえていたのではなかろうか。つまり、国際的なビジネスの場で活躍することが想定される生徒たちにこそ、英語圏の“culture”が必要であると考えたのである。英米人と同じように英語を操るだけでなく、英米人と同じ教養を持ち、英米人と同じ立ち居振る舞いをする、すなわち神田自身を国際的ビジネスマンのモデルとして提示することが神田にとっての英語教育であったと考えられるのである。

そして、神田のそうした発想は後の教員にたちにも受け継がれたと推察される。如上のとおり、東京高商・商大の英語教員の多くは神田に見込まれて就任しているが、その教員の中に文学士や B.A.、M.A. の学位を有するものも含まれ、文学研究者も少なくない<sup>54</sup>)。また如上の上田も、商大で「英米文化論」を講じたこともある。さらに、神田がその就任

<sup>50</sup>) Kanda, "English in Middle Schools", 231.

<sup>51</sup>) 神田、「中学校に於ける英語」、236 頁。

<sup>52</sup>) 如上の杉本のいう「ブラック・キャット」はエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) の『黒猫 (The Black Cat)』であろう。

<sup>53</sup>) 名古屋 抱嵐子生 「神田先生の授業」 『英語青年 Baron Kanda Number』、365 頁。

<sup>54</sup>) たとえば、神田に“culture”方面の開拓を託された舟橋 雄<sup>ふなはしたけし</sup>は、『英米現代の文学』(明誠館書店、1922 年。)などの著作を残した文学研究者であるし、神田とともに旧制中学向けの英語教科書 *The King's Crown Readers* などを作った長岡 拡<sup>ながおかひろむ</sup>も、英文学研究者という顔も持っていた。

に関わったとは考えられないが、神田の四男、盾夫と高等師範学校附属小・中学校の同級生であった中村為治など、東京帝国大学文科大学英文科の卒業生も東京商大附属商学専門部の教壇にたっている。

## 4 おわりに

「実用」は、外国語教育を論ずるうえでしばしば争点となる用語である。とりわけ、卒業後すぐに社会に出て働くことを前提とした「完成教育」の場としての高等商業学校では特に意識されるものであったであろう。しかしながら、「実用」なる語はこんにちにおいても揺れがあり、外国語教育においていかなる基準によって「実用」が定義されるのかは曖昧なままである。

高等商業学校の一つである、東京高等商業学校および東京商科大学商学専門部において教授あるいは講師として30年余、英語教育に従事した神田乃武は、「実用」を英語の運用能力を体得することだけでなく、その英語を使用する地域における“culture”を身につけることも含めて捉えた。14歳で渡米した彼自身が、滞在先のキリスト教徒の家庭やアマスト・ハイスクールやアマスト・カレッジにおいて身につけた立ち居振る舞いを含めたさまざまなものを自らがモデルとして提示しようとした。

彼がそのような形での英語教育をおこなった背景には、英語の知識を商業、国際的なビジネスにおける戦略的な道具と捉える発想があった。そうした場において、単に英語を運用できるということだけでなく、英語圏の人々と同じ水準の“culture”を持っていることが必要とされると考えたのであろう。

彼にとっては、英語を含めた外国語が「実学」であった高商の商業教育においても、“culture”の学習が必須であった。高商における文学作品をつうじた外国語教育は、「商学に文化科学の豊かさ」を付加したり、生徒に「人間的ゆとり」を与えるような人格陶冶ということだけでなく、より「実用的な」目的の一貫であったと考えられるのである。

そして神田の構想は、その死後も引き継がれていく。東京高商・商大・予科・商学専門部の英語教師たちの多くは神田によってリクルートされていた人物であった、東京高商・商大の卒業生たちであった。それゆえに、神田の「実学」としての“culture”が高商・商大の英語教育に引き継がれていったと考えられる。